

連載

## フィールド・アイ Field Eye

ノルウェーから——②

スタヴァンゲル大学 小野坂 優子

Yuko Onozaka



### 生産性と労働時間

OECDの2016年の統計で雇用者あたりの年間平均労働時間を見ると、ノルウェーは1426時間。ドイツ、デンマークに続いてOECD中第三位の少なさです。ちなみに日本は1714時間。日本人はノルウェー人より平均で300時間近く余計に働いているようです。しかし、労働時間当たりのGDPでみた生産性は、ノルウェーはおよそ78アメリカドル。ルクセンブルクとアイルランドに次いでまたまた第三位。日本は42ドル。なんと、ノルウェーのほぼ半分ではありませんか。ノルウェーの生産性の高さは石油産業のせいかもしれないと思いますが、石油のないデンマークもスウェーデンも似たような生産性です。

この統計でみた労働時間の短さは、決して嘘やまやかしや統計上のトリックなどではなく、ノルウェーでは、本当に、労働時間が短いのです。仕事が好きなのは、もう少し働かせて、と思うほど。何しろ、朝8時20分に家を出て、授業がなければ午後3時や4時には家に帰っている生活を送っているのです。大学教員という一般よりフレキシブルな仕事だからと思われるかもしれませんが、私の周りの人たちも似たような時間働いており、また、私の通勤時間はちょうど通勤・帰宅ラッシュと重なるので、私と同じような時間帯に働く人たちが沢山いるのだと思います。ノルウェーでは男女とも、フルタイムで働いていてもだいたい午後4時、遅くとも5時くらいまでには家に帰ってきているのです。

日本で、残業を減らすために午後8時以降は残業禁止という話を何かで読んで、減らしても夜8時帰りな

の!と、ものすごくびっくりした覚えがあります。なぜ日本の長時間労働は減らないのか。そして、ノルウェー人はどうやって、短時間労働と経済的なアウトプットを両立させているのか。私は理由のひとつに仕事と時間に対する考え方の違いがあるように思います。日本ではなんとなく、時間をかける=手間をかけてよい仕事をする、というポジティブな感じがするのですが、ノルウェーでは時間をかけることが必ずしも良いとは思われない気がします。日本では、時間をかけてこそ良いものが作れる、そして細部にまでこだわって、というイメージ(あくまでも私個人のイメージ)ですが、ノルウェーでは、限られた時間の中で最低ラインをクリアした物を作る、という感じ。この最低ラインは、決して粗悪品ということではなく、プロとしてこれならば可、というレベルを想定していただければよいかと思います。つまり、日本ではまず仕事があって、それに時間を合わせる感じですが、ノルウェーでは、まず時間の枠があって、そこに仕事を押し込める感じでしょうか。そして、ある人があるレベルの仕事をする場合に必要な時間のインプットはこれくらい、というだいたいの目安があり、さらに限りある労働時間の範囲内で片付けられる以上の仕事は課さない(受けない)、という理解があるわけです。そして、この時間内にだいたいこれだけの仕事をしてこれくらいの成果を出す、というのがそれなりに決まっているので、想定以上の時間がかかるのは、雇用する側の判断ミスか雇用される側の効率が悪いにあるいはその両方、ということになるわけです。仕事がそういうシステムで成り立っている以上、残業はあまりしません。もちろん、何かの締め切り前とか、突発的な出来事のために仕事の量が増えるとかで残業ももちろんあり得ますが、あくまでも特別な場合やとくに忙しい時期の話で、普通に働く人たちは基本的に残業せず、必要以上の仕事もしない。日本にありそうな、痒い所に手が届く、とか、相手が想定する以上のものを提供する、という気持ちは少なそうです。もちろん、ノルウェーのシステムがどの点においても優れているとは思いません。例えば、クリエイティブな仕事は想定以上の仕事をしてこそ、既存の型を破るようなイノベーションが生まれたりするのかもしれませんが、職人技の極み、みたいな仕事は、時間のインプットがどうという次元の問題ではないのでしょうか。しかし、そういう仕事についている人は、仕事を愛しているとか、仕

事=生活というのが自然であり、労働時間が長くても(少なくとも本人は)あまり気にならないのではないのでしょうか。一方、ごくごく普通かつマジョリティの人にとっては、仕事も人生も両方大事なノルウェースタイルの方が自然なのではないのでしょうか。

とはいえ、普段夜の10時に帰宅するような人が急に4時に帰宅するようになったりしたら、それはそれで自然でないのかもしれませんが。しかし、ノルウェー人だって、4時に帰宅して家族で夕食を食べた後、ゆっくりワインでも飲んでいるわけではなく、それなりに忙しいのです。何しろ、子供のアクティビティー(サッカーやダンス、スイミングなどの運動系、ボーイ・ガールスカウトなどのユニフォーム系、ピアノやヴァイオリン、吹奏楽などの文科系もあり。複数やっている子も多数。日本のような学習塾は無し)関連の要件がやたらあるのです。そして、ノルウェーでは家族にやさしい政策とも相まって、子供がいる人(養子やパートナーの連れ子も含めて)がほとんどで、しかも子供はだいたい複数いるので、両親は手分けして、例えば父が上の子をアクティビティーに連れて行って帰りにスーパーで食料品を買ってくる間、母が家で夕食の後片付けをしつつ下の子の面倒をみたり。おじいちゃん、おばあちゃんを頼ろうにも、彼らもまだ現役で働いていたり、自分たちの人生に忙しかったりして、いつも頼みにはできません。休日も、家の雑務と家族や友人とのアクティビティー(ハイキングに行ったり、パンやお菓子を作ったり、食事をしたり、また子供の友達のバースデーパーティーやお泊り会など、子供関連の要件は週末も尽きません)で、やはりそれなりに忙しいのです。

そうして見ていると、ノルウェーの人は仕事の時間が限られている分、マージナルプロダクティビティーがまだあまり減っていない位置で仕事をしているよう

です。そして、割り当てた時間内に可能な限りのアウトプットを出すけれど、できない事は無理してしない、そしてそれに対して罪悪感はない、という人たちです。そうやって、必要以上の仕事はせず、仕事に侵食されない時間を守って、それをかなりの比率で子供や家族に割り当てる(自分用も少し)。とにかく、時間のコンパートメント化が上手です。そんな生活を、社会的な地位にあまり関係なく、沢山の人が送っているように思います。別の見方をすれば、仕事も家族も趣味も充実した生活を送っていないと、「できる人」とは見なされない雰囲気です。仕事ができるのは当然として、その上家族の仲もよく、先週はフルマラソン走りました、とか。そんな、欠けたもののない人生を得ることへのプレッシャーはそれなりに大変ですが、それでも、ノルウェー人は日本人より格段に高い生産性を紡ぎ出し、国民は概して幸福で、さらに人口に対するオリンピックのメダルの数まで多い(特に冬季オリンピックがすごいです)。なんだか、いろいろな意味で得をしているように見えます。そんな得な感じを、日本人も学べるところがあるのではないかと日本の過労死などの悲しいニュースを見るたびに思うのです。国民性とか社会構造とか産業構造とか文化の違いによるので日本人には参考にならない、と言って片付けられてしまうには少しもったいないような気がします。

おのざか・ゆうこ スタヴァンゲル大学ビジネススクール教授。最近の著作に“Household Production in an Egalitarian Society,” *Social Forces*, forthcoming. 環境経済学、応用計量経済学専攻。